

企画展示 教員が薦める

経済学 の本

展示図書についての紹介文



「教員が薦める 経済学の本」

期間:2015.6.11(木)~7.7(火)

場所:愛知県立大学長久手キャンパス図書館 1階707

経済分野の教員がオススメする図書を紹介しています。

教員コメント目次

- (1) 『国富論』(全4巻) アダム・スミス著 岩波書店(岩波文庫) <p.2>
- (2) 『資本論』 カール・マルクス著 大月書店 <p.2>
- (3) 『賃労働と資本』 カール・マルクス著 光文社(光文社古典新訳文庫) <p.2>
- (5) 『マーシャル経済学原理』(全4巻) アルフレッド・マーシャル著 東洋経済新報社 <p.3>
- (6) 『雇用, 利子および貨幣の一般理論』(上下巻) J.M.ケインズ著 岩波書店 <p.3>
- (7) 『近代世界システム』(全3巻) I.ウォーラーステイン著 名古屋大学出版会 <p.3>
- (8) 『近代欧州経済学史序説(大塚久雄著作集 第2巻)』 大塚久雄著 岩波書店 <p.4>
- (9) 『21世紀の資本』 トマ・ピケティ著 みすず書房 <p.4>
- (10) 『経済政策で人は死ぬか?』 D.スタックラー、S.バス著 草思社 <p.4>
- (11) 『資本主義対資本主義』 ミシェル・アルベール著 竹内書店新社 <p.5>
- (12) 『アジア市場幻想論: 市場のフィルター構造とは何か』 川端基夫著 新評論 <p.5>
- (13) 『里山資本主義』 藻谷浩介・NHK 広島取材班著 角川書店 <p.5>
- (14) 『経済地理学キーコンセプト』 青山裕子[ほか]著 古今書院 <p.6>
- (15) 『日本経済地理読本(第9版)』 竹内淳彦・小田宏信編著 東洋経済新報社 <p.6>
- (16) 『経済学から何を学ぶか?: その500年の歩み』 伊藤誠著 平凡社 <p.6>
- (17) 『世界共和国へ』 柄谷行人著 岩波書店(岩波新書) <p.7>
- (18) 『内部組織の経済学』 今井賢一[ほか]著 東洋経済新報社 <p.7>
- (19) 『生命系のエコノミー』 玉野井芳郎著 新評論 <p.7>
- (20) 『日本経済が手に取るようによくわかる本』 小宮一慶著 日経BP社 <p.8>
- (21) 『現代中国経済論』 加藤弘之・上原一慶著 ミネルヴァ書房 <p.8>
- (22) 『孤立と統合: 日独戦後史の分岐点』 渡辺尚[ほか]編 京都大学出版会 <p.8>
- (23) 『ユーロ危機と超円高恐慌』 岩田規久男著 日経プレミアシリーズ <p.9>
- (24) 『自動車の社会的費用』 宇沢弘文著 岩波書店(岩波新書) <p.9>
- (25) 『社会的共通資本』 宇沢弘文著 岩波書店(岩波新書) <p.9>
- (26) 『低炭素経済への道』 諸富徹・浅岡美恵著 岩波書店(岩波新書) <p.10>
- (27) 『産業集積の本質』 伊丹敬之[ほか]編 有斐閣 <p.10>
- (28) 『戦後世界経済史』 猪木武徳著 中央公論新社(中公新書) <p.10>
- (29) 『茶の世界史』 角山栄著 中央公論社(中公新書) <p.11>
- (30) 『人類は絶滅を選択するのか』 小原秀雄著 明石書店 <p.11>
- (31) 『脱牛肉文明への挑戦』 ジェレミー・リフキン著(北濃秋子訳) ダイヤモンド社 <p.11>

『国富論』(全4巻) [請求記号:080/105-1~4/22K]

アダム・スミス著 岩波書店(岩波文庫) 2000年

言わずと知れた経済学の古典である。私が入学した経済学部の一回生向けの専門講義で取り上げられたのが、この本であった。当時は、意外に取り組みやすい古典と感じたが、その分歯ごたえの無さに印象は薄かったが、最近読み返してみると、その平易な表現や分析に経済学の奥深さを感じるようになった。経済学の教科書よりも、まずは国富論を。

推薦教員 中屋宏隆(外国語学部ヨーロッパ学科)

~★~★~★~

『資本論』 [請求記号:134/23~/242]

カール・マルクス著(マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳) 大月書店 1968年
(原著は1867年)

経済学の潮流は、大きくは近代経済学とマルクス経済学の二つの流れがあり、『資本論』はマルクス経済学の基本大系が示された古典の代表的著作である。20世紀末におけるソビエト連邦の崩壊や東欧社会主義国の政治経済運営の行き詰まりから、マルクス経済学の影は薄くなったが、世紀末以降の欧米資本主義諸国における経済政策の困難や行き過ぎた市場経済依存に対する批判から、近年再評価の動きがある。資本の運動法則、剰余価値生成のメカニズムなど、資本主義的社会経済制度の歴史的な本質や問題を解明した大著である。

推薦教員 中島茂(日本文学部歴史文化学科)

~★~★~★~

『賃労働と資本』 [請求記号:331.6/Ma59]

カール・マルクス著(森田成也訳) 光文社(光文社古典新訳文庫) 2013年

今『21世紀の資本』という本が飛ぶように売っていますが、本家のマルクスの『資本論』を知っている人が、今の県大生の中にはどれほどいるでしょうか。

しかし、マルクスが世界史に及ぼした影響は巨大です。というわけで、マルクス入門編として『賃労働と資本』を挙げておきます。これは元は『新ライン新聞』の連載論説で、現在はマルクスの盟友エンゲルスが手を加えたものが刊行されています。短いので読みやすいと思います。

推薦教員 野内美子(外国語学部ヨーロッパ学科)

『マーシャル経済学原理』(全4巻) [請求記号:331.74/Ma52/1~4]

アルフレッド・マーシャル著(馬場啓之助訳) 東洋経済新報社 1965年

原著の A.Marshall(1842-1924)による”Principles of Economics”は、初版が1890年に出されており、経済学における新古典派主義の教科書的な著作である。一般均衡理論における価格と需要の関係理論を精緻化し、消費行動の基礎となる限界効用の考え方と供給側の生産費用に関する理論を一体的に捉えることを試みた。地理学的関心から見ると、産業活動にとっての「集積の利益」が「外部経済効果」の考え方から説明されている。経済学界では長らく彼の弟子であるケインズの名が広く知られてきたが、産業集積という概念が注目されるようになって、近年はマーシャルの再評価が進んでいる。

推薦教員 中島茂(日本文化学部歴史文化学科)

~★~★~★~

『雇用, 利子および貨幣の一般理論』(上巻)(下巻)

[請求記号:080/145-1/22K, 080/195-34/145-2]

J.M.ケインズ著(間宮陽介訳) 岩波書店(岩波文庫) 2008年

経済政策を学ぼうとするならば、避けては通れない古典といえます。

ケインズは、1929年の世界恐慌時の失業増加等を目の当たりにして、政府による有効需要管理という経済政策を提唱しました。このケインズ主義的経済政策は新自由主義の猛攻をうけるまで世界的に広く実践されていました。現在でも「ケインズに立ち返れ」という議論はあります。難物ですが、ケインズ入門書はいろいろ出ているので、それらを参考にしながら読んで下さい

推薦教員 野内美子(外国語学部ヨーロッパ学科)

~★~★~★~

『近代世界システム』(全3巻) [請求記号:332.3/W36/1~3]

I.ウォーラーステイン著(川北稔訳) 名古屋大学出版会 2013年

大塚久雄の『近代欧州経済史序説』の対極にある本。国民国家単位の発展段階を叙述する一國史観を否定し、世界の歴史を諸システムの歴史として捉える。そこでは、いわゆる「先進国」と「後進国」は、一つのシステムのなかで「中核」諸国と「周辺」として一体的に捉えられ、貧しい地域の存在と豊かな国の存在は不可分の一つの現象として説明される。ただ、大塚史学同様、実証的な面からの問題点は多い。

推薦教員 奥野良知(外国語学部ヨーロッパ学科)

『近代欧州経済学史序説（大塚久雄著作集 第2巻）』 [請求記号:332/2B/206]

大塚久雄著 岩波書店 1969年

本書は西洋経済史の古典中の古典で、戦後日本の社会科学全般に大きな影響を与えた。カール・マルクスの唯物史観とマックス・ヴェーバーの世俗内禁欲が資本主義の「精神」に適合性を持っていたとする説を融合した大塚久雄の歴史学は大塚史学と呼ばれ、本書はその代表的著作。西洋、特にイギリスを過度に理想視したその主張は、後年多くの批判を浴びたが、戦後日本の思想史の画期をなす書として本書を読むと、極めて興味深い。

推薦教員 奥野良知(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『21世紀の資本』 [請求記号:331.82/P64]

トマ・ピケティ著 みすず書房 2014年

昨年から今年にかけて、大変注目された書。長期的にみると、資本収益率(r)は経済成長率(g)を上回るため、富裕層への富の集中が生じ経済格差が広がる。この格差を是正するために、富裕層に対する累進課税を国際的に導入することを提唱している。日本のマスコミは批判精神の牙を抜かれ、格差拡大を容認しているのかと想像していたら、ピケティを大いに持ち上げてやや驚いた。日本の経済史学会が無反応なことにも驚いた。

推薦教員 奥野良知(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『経済政策で人は死ぬか？：公衆衛生学から見た不況対策』 [請求記号:498.13/St9]

D.スタックラー、S.バス著(橘明美、臼井美子訳) 草思社 2014年

不況下における緊縮政策によって「人は死ぬ」ということを、公衆衛生学の専門家がイデオロギーによってではなく、各国の統計から検証した最新の研究書。日本のマスコミはピケティで大騒ぎだったが、本書の方がむしろ取り上げられるべき価値があるのではと思われる。IMFの命じる緊縮政策に従わずEUにも加盟していないアイスランドが国民の意見を尊重しながら経済を回復した事例は、カタルーニャ問題を考える際にも参考になる。

推薦教員 奥野良知(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『資本主義対資本主義』 [請求記号:332//1090]

ミシェル・アルベール著(小池はるひ訳) 竹内書店新社 1992年

東西対立構造崩壊後、いち早く資本主義社会も一枚岩ではないことを明らかにした本です。「株主利益の追求」を重視する英米(アングロサクソン)型資本主義と、「社会的公正」を重視して経済活動を行うライン・アルプ型資本主義という2つのモデルを示しました。

グローバル化の進展に伴うアングロサクソン化の進行等により、現在ではさらに多様な資本主義のモデル分けがなされていますが、それらのモデル分けにも影響を及ぼしています。

推薦教員 野内美子(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『アジア市場幻想論: 市場のフィルター構造とは何か』 [請求記号:673.8/Ka91]

川端基夫著 新評論 1999年

この本は「経済」というよりも「商学」を基本に置くグローバル市場論の書である。日本企業の国際進出、とくにアジア市場への進出を取り上げながら、市場規模を単純な人口数値や所得水準だけで捉えてはならないことを、経験則として抽出された「市場のフィルター構造」という概念から論じている。全国各地の「市場」となる住民の行動特性や文化的背景、それを支えている自然環境や歴史条件など、各市場がもつ「フィルター」を通過できた企業のみが現地で「成功」できると論じた話題の書である。

推薦教員 中島茂(日本文化学部歴史文化学科)

～★～★～★～

『里山資本主義』 [請求記号:332.107/Mo82]

藻谷浩介・NHK 広島取材班著 角川書店 2013年

「里山資本主義」という言葉は、NHK 広島放送局のディレクターが名付けた言葉で、中国地方のローカル番組でシリーズを組んで放映され、紹介された内容を、同じく中国地方出身のエコノミストである著者がとりまとめたのがこの本である。その主張は単に田舎に引きこもって前近代的な生活に戻れというものではなく、各地・各地域のもつ強み(地域資源、マンパワーなど)を活かし、域内経済循環を生み出しつつ、強みの部分はしっかりと国際社会の中に位置づけて、まともな実体経済を基礎に地域経済の維持・振興を図ろうという主張である。

推薦教員 中島茂(日本文化学部歴史文化学科)

『経済地理学キーコンセプト』 [請求記号:332.9/A58]

青山裕子、J.T.マーフィー、S.ハンソン著(小田宏信他訳) 古今書院 2014年

経済地理学を学ぼうとする学生にとっての教科書的な本であると同時に、経済地理学の基本的な概念を、最新の研究状況を踏まえて23の項目に分けて論じることで、この学問分野の全体像を見渡せる斬新な企画で書かれた本である。著者たちはアメリカのクラーク大学の地理学スタッフであるが、単にアメリカのみで通用する話題ではなく、斯学の基本的な考え方、捉え方を示そうとしており、専門辞典的な使い方も可能であろう。

推薦教員 中島茂(日本文化学部歴史文化学科)

～★～★～★～

『日本経済地理読本(第9版)』 [請求記号:332.107/Ta67]

竹内淳彦・小田宏信編著 東洋経済新報社 2014年

この本は1970年代に初版が刊行されて以来、数年ごとに版を重ねて、新しい知見とデータをもとに、日本経済の地域的な特性とその要因、課題を、中心地域(大都市圏)、周辺地域(地方圏)、中間地域に三大別した上で、そのなかをさらに地方単位ごとに詳しく論述したテキストである。「日本経済地誌」と言い換えてもよいが、各版ごとにそのときどきの各地に通じた執筆者が、それぞれの地域の経済地理学的特性を、ポイントを突いて要領よくまとめた本である。

推薦教員 中島茂(日本文化学部歴史文化学科)

～★～★～★～

『経済学から何を学ぶか?: その500年の歩み』 [受入中]

伊藤誠著 平凡社(平凡社新書) 2015年

長年東京大学でマルクス経済学を研究してきた著者による経済学の発展過程を平明に解説した新書である。どの経済学派にも目配りがきいていて、高校までの知識を持ってすれば十分に読破可能である。経済学はその時代ごとの問題に取り組み、それを克服することを課題として来たが、その学問的存在意義は今日においても変わることはない。また、経済学はそうでなければならぬ。

推薦教員 中屋宏隆(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『世界共和国へ』 [請求記号:080/1001/19B]

柄谷行人著 岩波書店(岩波新書) 2006年

日本を代表する現代思想家・評論家の一つの到達点を示す書物である。世界共和国という発想は、カントから着想を得た物であるが、柄谷は今日的国民国家の問題点を解消するための方策として提示している。経済学を学ぶ本というわけではないが、国民国家の問題は、経済学にとっては避けて通れない問題である。また、壮大な社会構想の提示などということが、なされなくなった時代にあって、本書の意義は大きい。

推薦教員 中屋宏隆(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『内部組織の経済学』 [請求記号:335.1/43]

今井賢一[ほか]著 東洋経済新報社 1982年

本書は、従来の経済学、経営学、社会学では一貫した説明ができなかった組織と市場の問題を経済学的に分析し説明することを試みた書。どのような場合に「組織」が選択され、逆にどのような場合に「市場」が選択されるのか、またその中間に位置する「中間組織」が選択されるのはいかなる場合か、というような問題が、取引コスト理論などを用いて明解に分析される。類似書は増えたが、本書の価値は未だ衰えていない。

推薦教員 奥野良知(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『生命系のエコノミー：経済学・物理学・哲学への問いかけ』 [請求記号:330.4/Ta78]

玉野井芳郎著 新評論 2003年(初版1982年)

本書は、既存の経済学・物理学・哲学が、現代の諸問題、とりわけ原発を中心とする環境問題に何ら対応できていないのではないかという根本的な問いから出発して、本書の書名にもなっている「生命系のエコノミー」、つまり「生命系＝生きている系にもとづく広義の経済学」の構築を目指した書で、多くの分野の人に多大な影響を与えた。大学生だった私に「地域」の視点から学問を志す契機を与えてくれた思い出深い書。

推薦教員 奥野良知(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『日本経済が手に取るようによくわかる本』 [請求記号:332.107/Ko64]

小宮一慶著 日経BP社 2010年

著者は、日本の代表的な経済新聞である日本経済新聞を片手に経済分析をする経営コンサルタントである。経営コンサルタントとは、企業相手に今後の経営方針や投資計画について助言するのが仕事であるが、彼らはその企業の内実を知るだけでなく、今後経済全体がどう展開して行くかを把握しておかなければならない。そのために筆者は短時間で日経新聞片手に直近の経済動向を分析しているわけだが、本書はそのコツを説明してくれている。

推薦教員 中屋宏隆(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『現代中国経済論』 [請求記号:332.22/Ka86]

加藤弘之・上原一慶著 ミネルヴァ書房 2011年

中国経済について、経済の歩み、産業構造、格差や貧困、環境問題、グローバル化など、幅広い視点から、学ぶことができるようになっている。また、初学者にも理解できる平易な文章で書かれている。周知のように、中国は、改革開放などを経て、驚異的な経済成長を続け、世界経済のなかでも重要な役割を担う存在となっている。日々、中国に関して多くの情報があふれるなか、バランスよく中国を理解する重要性がますます高まっている。

推薦教員 西野真由(外国語学部中国学科)

～★～★～★～

『孤立と統合：日独戦後史の分岐点』 [請求記号:332.107/Ko79]

渡辺尚 [ほか] 編 京都大学出版会 2015年

京都大学でドイツ経済を研究してきた編者(渡辺)による日独戦後経済比較論集である。タイトルには、アジアで「孤立」に向かう日本と、ヨーロッパで「統合」に向かうドイツという意味が込められている。後者の統合に向かうドイツは、ユーロ危機以降の状況を加味して再検討する必要があるが、アジアで孤立する日本という状況は、今日でも基本的に変わらない。各国の経済システムの固有性を重視する立場から経済を分析する視角を身につけたい場合は、一読の価値あり。

推薦教員 中屋宏隆(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『ユーロ危機と超円高恐慌』 [請求記号:338.9/197]

岩田規久男著 日経プレミアシリーズ 2012年

現在の日本銀行の金融緩和路線を副総裁として支える経済学者が、通貨ユーロの構造的問題を指摘した書物である。リフレ論で鳴らす筆者としては、ユーロが抱える構造問題や欧州中央銀行の緩和慎重路線は、批判しやすかったのであろう。よって、結論もユーロの今後に否定的である。私のようにユーロに肯定的な立場の研究者とは意見は異なるが、学問やそこから派生する政策論争は、こうした対立軸があることで発展する。皆さんにはそうした対立軸をしっかり理解し、自分ではどういった発展的結論を導き出せるかという思考方法を大学時代に身につけて欲しい。

推薦教員 中屋宏隆(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『自動車の社会的費用』 [請求記号:080/890/19]

宇沢弘文著 岩波書店(岩波新書) 1974年

「社会的費用」とは外部不経済が発生する事象に対して、その発生者が費用負担せず、税金など社会全体で負担せざるをえない費用のことをいう。「外部不経済」とはある主体の活動や行為が第三者に対して不利益を与え、第三者の側に費用負担を生じさせる状態のことを指している。自動車が社会的に存在しうるためには、その販売価格に加えて、道路整備や安全対策、環境対策など多くの「社会的費用」がかかり、それらを社会全体で負担してまで「自動車社会」を本当に維持する必要があるのかという、著者の問いかけはその時代状況から見てもたいへん興味深い。

推薦教員 中島茂(日本文化学部歴史文化学科)

～★～★～★～

『社会的共通資本』 [請求記号:080/696/19B]

宇沢弘文著 岩波書店(岩波新書) 2000年

地域や社会を基本的に支えるシビル・ミニマムとしての教育基盤や公共交通、豊かな自然環境の維持など、より広い「公共財」を維持していく費用を、どのように誰が負担していくのか。著者はこうした社会的に最低限必要とされる公共財を「社会的共通資本」という概念で説明し、市場メカニズムだけで進む国土の開発や地域のあり方に対して、本当の意味での基盤整備の必要を、

経済学的概念から訴えようとしている。その片鱗は前著『自動車の社会的費用』にも色濃く認められる。

推薦教員 中島茂(日本文化学部歴史文化学科)

～★～★～★～

『低炭素経済への道』 [請求記号:080/I95B/1241]

諸富徹・浅岡美恵著 岩波書店(岩波新書) 2010年

経済と環境は対立概念のように捉えられてきた。しかし、世界や日本の産業経済のあり方、環境・資源問題のあり方を見ると、今後の環境保護に向けた政策や取り組みが、むしろ新しい技術開発を刺激して、新産業分野が開け、持続的な経済成長を可能にするという、パラダイムの転換を指摘しているのが本書である。そこでは環境負荷の大きい一極集中的な巨大生産方式から中規模な分散的生产方式への展開が求められており、『里山資本主義』と共通したスタンスが認められる。

推薦教員 中島茂(日本文化学部歴史文化学科)

～★～★～★～

『産業集積の本質』 [請求記号:335//960]

伊丹敬之[ほか]編 有斐閣 1998年

「産業集積」とは一つの比較的狭い地域に相互関連の深い多くの企業が集積している状態をいう。東京の大田区、東大阪、シリコンバレーなどは有名な産業集積地。また愛知県も極めて重要な産業集積地域であり、私が専門とするカタルーニャと同様、繊維産業の集積地から機械産業の集積地へ転換を遂げた地域である。では、産業が集積するとどのような利点があるのか？本書は産業集積の多様な側面とその面白さを正面から論じている。

推薦教員 奥野良知(外国語学部ヨーロッパ学科)

～★～★～★～

『戦後世界経済史』 [請求記号:080/C64/2000]

猪木武徳著 中央公論新社(中公新書) 2009年

戦後の世界経済史について、バランス良く書かれている。新自由主義についても「公平」な視点から書かれており、その関連で、日本のJRと新幹線についても紹介されている。

推薦教員 草野昭一(外国語学部国際文化学科)

『茶の世界史：緑茶の文化と紅茶の社会』 [請求記号:080/596/12]

角山栄著 中央公論社(中公新書) 1980年

ペットボトルのお茶が出現するまで、お茶はタダという認識だった日本人にとって、近代資本主義の形成にお茶が大きくかかわったということはなかなか理解がしがたいことである。17世紀にはじめてアジアからヨーロッパに伝わったお茶は日本の緑茶だとか。それが徐々に紅茶に変わっていく。精神性を重んずる日本人のお茶の飲み方と違い、ヨーロッパ人は砂糖を入れて飲み始めた。そこから大きな悲劇が始まる。ブラジルと西インドにアフリカの黒人奴隷を使った砂糖プランテーションが形成されていった。そして中国からの輸入茶を決済するために、イギリスは中国にアヘンを持ち込みアヘン戦争が始まる。もとは上流階級の飲み物だったお茶は産業革命とともに労働者階級にも広がっていく。労働者は、パンと砂糖入りの紅茶で朝食を済ませて工場へ入った。砂糖入り紅茶は人類初の栄養ドリンクである。たかがお茶、されどお茶。

推薦教員 草野昭一(外国語学部国際文化学科)

～★～★～★～

『人類は絶滅を選択するのか』 [受入中]

小原秀雄著 明石書店 2005年

生態系の中軸にあるのは食物連鎖である。もともとは「食うか食われるか」の連鎖の中にあっただけ(人間)だが、農業と牧畜を開始することによって一方的に「食う」側にまわった。そこから、地球の生態系の「組み換え」が始まっていく。地球上のあらゆる種が、ヒト(人間)がつくる生態系への適応をはかる(家畜化)か、もしくは果たせず絶滅していく。今日、植物界そして動物界の大々的な組み換えと大量の種の絶滅が進行している。最終的には人類の「絶滅」につながることもあり得るわけで、しかもそれは、人類そのものが自ら「選択」している結果なのである。

推薦教員 草野昭一(外国語学部国際文化学科)

～★～★～★～

『脱牛肉文明への挑戦』 [受入中]

ジェレミー・リフキン著(北濃秋子訳) ダイヤモンド社 1993年

本来イネ科の草を食むウシは、カロリーの高いウモロコシや大豆をもとにした濃厚飼料を与えられれば大方消化器系の病気を引き起こす。タンパク質形成を促進するホルモン投与も広く知られている。あるうことか、BSE騒動によってウシには肉骨粉という動物性の飼料が与えられていることが明るみに出た。スクレイピーという風土病のヒツジの肉がリサイクルされていたのである。このリサイクルにはウシもリサイクルされ共食いという現実がある。可能性としては、イヌ・ネコなどペット類、果ては産院から出る胎盤までリサイクルに入りうる。実際にそのような実例が紹介されている。

推薦教員 草野昭一(外国語学部国際文化学科)